

# 終戦前後の千歳

榊原武雄

千歳を知る会会長・千歳文化財保護協会会長

私が新潟県の佐渡から千歳に出てきたのは十五歳の時、昭和十九年のことです。太平洋戦争の最中で、千歳には海軍航空隊があり基地の町でした。地域や生活が大きく一変したこともあり当時のことは、今でも鮮明に脳裏に焼きついています。私の記憶と記録を通して、昭和十九年から終戦前後の千歳の様子や思い出、体験などを振り返ってみることにしたいと思います。

## 小学校から青年学校へ

私は昭和十九年三月に千歳国民学校（小学校）高等科二年を卒業しました。男子二十一名、女子二十九名の五十名からなるクラスでした。

卒業後、山三ふじや渡部商店（現・山三ふじや）に就職しました。当時は戦争中でしたので、男子は強制的に青年学校に入学させられました。郵便局員も店員も農業に従事している者も、また、遠隔であった長都や木臼地区からも合流して週一回程度の授業を受けました。戦闘帽そっくりの帽子にブック靴、ゲートルを巻いて通学しました。授業は修身、国語のほか一般教養、軍事教練は銃剣道や武道、行軍や登山などの体力づくりなどで兵隊さんの予備軍の養成でした。教官には、大野一郎氏、浅見恒松氏がいきました。一般教養は稲川信夫先生、稲川八重子先生に習いました。校舎は最初、千歳国民学校に同居していましたが、後に現在のホテル日航千歳の



写真1 青年学校の記念写真  
前列左3人目から執筆者、浅見恒松、稲川信夫、校長、岡本町長、大野一郎、稲川（木滑）八重子の各氏

に現在の東雲町四丁目の旧航空廠寮の仮校舎に移ったのです。私はそこで千歳中学校の大川正治郎初代校長から本科四年の卒業証書をクラス代表として受けました。千歳中学校長は青年学校の校長も兼務していたのです。

山手側にあった海軍施設に移り、そこで終戦を迎えました。青年学校は形式的に戦後も一、二年続きですが、これに並行して昭和二十二年に六・三制によって新制中学校が発足し、十月

私達はその後、青年団として活動、先輩の指導のもと樽前登山や書道をした思い出があります。その後、千歳中学校が栄町に新校舎を建築したのは二十六年の夏頃でした（二十四年に現在の町名が付いた）。

また、千歳高等学校の前身は二十三年十月、道立野幌高等学校の千歳分校として発足し、一時は月寒高等学校の千歳分校となり、二十五年四月、本町三丁目にあった千歳町役場が東雲町に移転した跡の建物を改修し、道立千歳高等学校として授業が始まったのです。校長は小山勇蔵先生、事務長は宝賀秀雄さんだったと記憶しています。本格的な学び舎が北栄高台の『希望ヶ丘』に新築移転したのは二十七年のことでした。

### 千歳の町並みと風景

昭和十九年頃の千歳は、海軍航空隊基地の街でした。第一基地（航空隊）は完成していましたが、第二基地、第三基地（シユクバイ／現・東千歳駐屯地）は建設中でした。市街地には工事の請負業者、徴用された日本人や朝鮮人、女子挺身隊、兵隊さんなどで活気があり、街は人通りも多く賑わっていました。

千歳駅から室蘭街道（現・国道36号）を左に折れて航空隊までの、全長約一・八キロ、幅六メートルの白く輝くコンクリート舗装の道路がとても印象的でした。しかし、町並みは街道沿いの一本町であり、現在の本町に当たる川南地区は目黒鉄工所の辺りまでの広がりがある程度で、千歳駅前なども数軒の民家があるだけでした。

役場も病院も農業会（現・農協）も平屋建てでした。その中で目立っていたのは二階建ての旅館でした。航空隊の方から、新保旅館、朝日屋、かめや、大谷旅館、宮本旅館、千歳屋、そして千歳駅前につるや旅館があり、こんなに旅館が必要なのかと思うほどでした。ほかに目立つ建物として、山三

ふじや渡部商店、演劇や映画を上映する千歳座がありました。

現在の清水町や幸町、そして朝日町などは湿地が多く、アシやヤナギのほかヤチハンノキなどの灌木が生い茂る風景が広がっていました。鉄北地区（現・青葉・末広地区）は、のどかな田園風景でした。千歳線は二基地道路（現・師団通り）あたりから航空隊に引込み線があり、隊への燃料や弾薬、物資の搬入を行っていて、また、第二基地のほうにも引込み線が分岐していました。

郊外にも思い出があります。まず、ユノミ（ハスカップ）狩りのことです。仲間と麦藁帽に空き缶や籠をぶら下げて今のアウトレットモール・レラの附近から第一滑走路近くに行きました。大粒の火山灰が剥き出しになっっていて、シラカバ、カシワ、サンナシなどの灌木が疎らに生え、乾いたコケが張り付き、正にサバンナのような光景でした。そこにユノミの木があり、黒紫色の実がついていました。夢中になって採っていると大きなア

リの巢を踏み散らし、体中がアリのだらけになりひどい目にあっただけだと思われれます。今、栽培されているものよりも小粒でした。甘すっぱく、とても美味しかったのですが、手の掌がユノミ色に染まったことも思い出です。

六月頃の休日、自転車を剣<sup>ケン</sup><sub>ツツ</sub>（現・泉郷）まで走らせたことがあります。シユクバイあたりまで自転車を進めると、急に黄金色の展望が目の前に開きました。新緑



写真2 馬追沼（昭和30年代初頭撮影）

の芽生えの上に広がる昨年の枯れアシの原が地平線まで続いている様子でした。ヤチハンノキが疎らに生える湿地帯のアシ原が長沼まで続いているのです。剣淵の高台にあった小学校に着き、校庭から眺めると、眼下に長都沼や馬追沼が、その向こうに千歳川がゆったりと流れていました。広い未開の大平原、遠くには樽前山、恵庭岳、空沼岳が連なる雄大なパノラマが心に焼きつき感激したものでした。この千歳原野一万二千鈔を干拓して肥沃な農地にしようと、山三ふじやの創業者渡部栄蔵による内陸運河の構想があったのです。

一方、当時東洋一と言われた千歳孵化場へもよく行きました。蘭越のアイヌ部落を通ると口の周りに刺青いれずみをしたおばあさんによく会いました。明治、大正の頃はそういった風習があったようですが、私の同級生の時代にはありませんでした。同級の今泉栄二君の父親柴吉さんは部落の長だったようですが、物静かな立派な人格者でした。一度、今泉君の家を訪れたことがありましたが、庭先の大きな木に小熊を繫いで飼っていました。

千歳孵化場は美しく整備された公園のようでした。山桜が何十本も植えられ、千歳の花見の場でした。蓄養池のほかにも大きな池があり、ニジマスがたくさん泳いでいて、きれいに刈り込んだ芝生に座り眺めたものでした。奥の小さな池には、ハンザキ(オオサンショウウオ)特別天然記念物)がいました。初めて見た時は、頭が大きく足があり、とても驚いた思い出があります。

秋には千歳橋の下をのぞくとサケの群れがよく見られました。

## 海軍の施設

市街地に隣接した現・春日町に海軍の士官官舎がありました。将官官舎・甲号二棟、佐官官舎・乙号一四棟、尉官官舎・丙号一六棟三二戸のほ

か丁号もありました。今でもその面影が残っている家があります。ママチには下士官官舎が一〇〇棟もあり、整然と並んで建っていました。現在の栄町には航空廠の宿舎群があり、軍関係の家族がたくさん住んでいました。現在の東雲会館の横に海軍の物資部という購買があり、軍関係家族が利用していました。また、社会福祉協議会のところには「海仁会」という下士官クラブが、伊勢クリニックの場所には「水交社」という士官クラブがあり、これから戦場に向かうかも知れない兵隊さんたちが一時の英気を養っていたのでしょう。さらに、現在の自衛隊募集事務所の場所には、憲兵隊の分遣隊があり警察とともに治安の維持に当たっていました。

現在の本町、朝日町などには、飯場といわれる建物があり、建設労働者の宿舎になっていました。また、消防署と改良住宅がある東雲町には二階建ての航空廠第一寮、第二寮(戦後は清和寮と呼ばれた)が建っていました。

第二寮には女子挺身隊員が五〇〇名ほど住んでいました。

また、印象深く思い出すのは、北海少年院や蘭越あたり、神社山やママチには分散工場などと呼ばれた隧道(横穴)がたくさんあったことです。これも海軍の施設でした。航空廠の工場のほか軍需物資を保管する倉庫などとして使用されていたようです。

海軍航空隊は昭和十四年の開隊ですが、当時の司令部ビル



写真3 第一清和寮 (昭和29年撮影)

(現・200ビル)は堅牢さ、大きさ、規模ともに北海道一のビルディングでした。現在も第二航空団の司令部ビルとして使われています。

当時、千歳の旅館や民家にも海軍の兵隊さんが下宿していました。兵隊さんが街に出ることを上陸、基地のことを甲板といっていました。不思議な呼び方と思っていましたが、だんだんと解ってきました。千歳という軍港に、飛行場という大きな航空母艦が接岸していると想定すると理解できます。

戦後、印象深い出来事として基地内の火災があります。昭和二十一年にはわずか半年の間に大きな火災が四回もありました。司令部ビルから営門に向かって一〇〇坪もあるかと思われる「雪中廊下」と言われる長い廊下があり、その両側にハーモニカのように兵舎や食堂、保管庫などが建ち並んでいました。二十三年にも六棟、二十四年には一四棟が焼失という記録があるようですが、木造の建物はほぼ焼き尽くされた感があります。航空廠の大きな建物が焼け落ちたのを見た覚えがあります。これも戦後の一コマです。

幸いにも千歳には空襲がありませんでしたが、神風特攻隊の訓練が行われていたそうです。昭和二十年七月十日に農業会(現・本町一丁目)の店舗に飛行機が墜落し、パイロットと民間人三人が巻き込まれて死亡するという大惨事があり、その瞬間を目撃した私は大きなショックを受けました。特攻隊の訓練機であったゼロ戦ということを知ったのは、戦後だいぶ後のことでした。

### 終戦の頃の川北(清水町)

昭和二十年の終戦によって、千歳は大きく変わっていきます。それまでは海軍の基地として海軍さんのほか、航空廠の人達、勤労働員の学生、海

軍施設部や工事業者の人達が多く働いていました。しかし、終戦によりほとんどの人達は故郷に帰ったり、新しい道を進み、町の統計を見ても一年間に七〇〇人も人口が激減し、一万ちよつととなり、これからどうなるのかと淋しい思いがしたものです。

そこへ米軍が進駐して新しい千歳の時代がおとずれてきたのです。その頃の千歳は現在の本町・東雲町など川南地区が街の中心で、役場、学校、病院、警察、郵便局、農業会、商店など、ほとんどの機能が集中していました。

ただひとつあった劇場・千歳座が立派な建物で川の向こう側(現・清水町)にありました。海軍の時代から戦後も相当長い期間、娯楽といえば映画を見ることでした。一時期は千歳座のほか、有楽劇場、オリオン座、公楽劇場と四館もあったものが、今は一館もないのは何とも淋しい限りです。

千歳座から鉄道まで、当時はほとんど建物がなく、アシやヤチハンノキなどの灌木が茂る湿地帯でした。当時、千歳川は切り替えによって直線化され、残された古川が目黒鉄工所の前まで大きく湾曲して続いていました。川沿いには二階建ての三軒町の建物が三つ目立っていました。その近くの灌木の中にレンガ造りの立派な家がぼつんとあり、「甲斐荘かひのしやう」と門札がかけてありました。元道庁の偉い方の家だと聞きました。ほかに民家が数軒あり、線路のほうには東川さんの家、鉄道官舎などがありました。何しろ山三ふじやの二階から千歳駅舎が見えたものです。

米軍は昭和二十年から駐留し、街も米軍相手の商売が逐次増えていき、スーベニアショップなどで賑わい始めましたが、何と云っても二十六年の朝鮮動乱の勃発に伴い米オクラホマ州兵の駐留が大きなブームを巻き起こしたのでした。ビアホールやバーが次々と出来、千歳の評判を聞き全国各地から集まって来た人達は本町や東雲町に土地(場所)がなくなり新しい場所

を求めて幸町、清水町へ集まるようになり友楽通りは主として商業者が、清水町には飲食業が集中し夜のネオンが華やかになり清水町発展の引金になりました。

急激な変化による建物ラッシュも、戦前に計画された市街地都市計画があったため、全くの混乱もなく家並みが出来たのです。ほとんど道路もないような中で、どんどん建築されながら、今のような整然とした街並みになったのは先人の偉大な先見性のおかげと改めて、頭の下がる思いがします。

昭和二十五年八月、警察予備隊が組織され、千歳には八月二十五日に臨時の部隊が第一基地内（現・航空自衛隊）に出来ました。二十七年には北信濃に新隊舎が完成し独立第一特科群が、二十九年には東千歳に第十一普通科連隊が、三十二年には二空団が移駐するなど日本一の自衛隊駐屯地となり清水町はいっそう賑やかさを増すようになりました。

#### あとがき

今、当時は振り返ると様々な思いが浮かんできます。終戦、米軍進駐、食料や物資の不足、インフレ、新円切替など、まさに「激動の時期」でした。

しかし、かすかな希望のもと、先人の知恵と町民の努力、心のつながり、暖かさがそこにありました。そのことを皆さんに再確認していただくことが出来れば幸いです。